氏名（本籍）	髙橋　あすみ
学位の種類	博士（医学）
学位記番号	博甲第　9941　号
学位授与年月	令和　3　年　3　月　25　日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	大学生のための自殺予防教育プログラムの開発

主　査	筑波大学教授	医学博士	松崎　一葉
副　査	筑波大学教授	医学博士	斎藤　環
副　査	筑波大学教授	博士（心理学）	庄司　一子
副　査	筑波大学准教授	博士（医学）	鈴木　英雄

論文の内容の要旨

髙橋あすみ氏の博士学位論文は、大学生のための自殺予防教育プログラムを新たに開発し、大学における自殺の一次予防に寄与することを目的として、自殺予防教育プログラムの実践と実証に取り組んだものである。その要旨は以下のとおりである。

研究１では、著者は大学生のための自殺予防教育の内容と構成を定めるために、大学生の自殺予防教育に関わる国内外の先行研究を概観した。その結果、大学生が（1）自分の心の問題に対処できるようになること、(2）自分の心の問題に対処できない時、他者に相談できるようになること、(3）他者に心の問題について相談された時、対処できるようになること、を目的とする自殺予防教育が重要であることを明らかにしたものである。これらの目的を達成するために、著者は大学生の自殺や他者に相談できるようになること（援助要請）に関連する要因として、メンタルヘルス・リテラシー、スティグマ、ゲートキーパーの三つを教育のキーコンセプトとして取り上げている。さらに、ロールプレイやディスカッションの有効性が示されていることから、著者は教育内容には演習を含み、かつ大学の現場に適した時間内で実施できる内容とすることを定めている。これら三つのキーコンセプトに基づいて、著者はプログラムを CAMPUS（Crisis-management、Anti-stigma、and Mental Health Literacy Program for University Students）と名付け、その開発を行ったものである。

研究２では、著者は CAMPUS 試作版の効果を探索的に検証することを目的とし、2017 年 7 月に医学生 145 名を対象に、必修授業の一環として実際に教育プログラムを実施した。試作版の内容は三つのコンセプトに基づき、講義と 2 種類の演習（ロールプレイ演習、ゲートキーパ―演習）から構成され、学生は全体の講義を受けた後、グループでシナリオに基づいてロールプレイを行う演習か、ゲートキーパーの動画を視聴して傾聴の練習をするゲートキーパー演習のどちらか一つに参加し、プログラム前後と 3 か月後に著者は質問紙調査を実施し、136 人の有効回答を分析した。その結果、CAMPUS 試作版に参加した対象者は、3 カ月後にうつの重症度が低下し、精神的健康が向上していたことが示された。また、ゲートキーパー演習を受けた学生のうち、プログラム前に自殺関連行動やうつ症状のあった学生は、3 か月後に自殺関連行動が減少していたことも示された。以上の結果から、CAMPUS 試作版に含まれる 2 種類の演習のどちらもが、大学生の自殺予防に寄与することが明らかにしている。

最後に研究 3 においては、著者はロールプレイ演習とゲートキーパー演習のどちらをも含めるように CAMPUS を改良し、その効果を改めて検証している。2019 年 7 月に医学生 136 人を対象とし、必修授業の一環として CAMPUS 完成版を実施し、プログラム前後、3 か月後、及び 6 か月後に質問紙調査

を実施し、プログラム前後と6か月後の調査回答が揃った107人の結果を分析した結果、107人のうち、プログラム前に何らかの自殺関連行動を示していた学生の割合が、6か月後には有意に減少していることが示された。また、プログラム直後に学生が自分自身の欠点や弱点を受容する心理傾向が有意に高まっていた。ゲートキーパーの自己効力感は、研究2と同様に直後に有意に向上して6か月後まで効果が維持されていた。さらに、専門家に対する援助要請の意図には縦断的な向上が認められたが、これは研究2では確認できなかった結果であり、CAMPUS試作版から内容を改善したことによって得られたことを明らかにしている。

以上より、著者は自殺予防教育プログラムCAMPUSの有効性を自殺関連行動を示す学生数の減少や、援助要請の意図の縦断的な向上という教育目的に適う効果を持って示したものである。

審査の結果の要旨

（批評）

本博士論文は、先行研究を緻密に調べ上げた結果に基づき独自性のある自殺予防プログラムを開発し、その効果を検証した実証研究となっており、その研究計画は合理的かつ実現可能性に配慮したものである。一連の研究計画を適切に遂行することにより、独自に開発した大学生向けの自殺予防プログラムが、当初より想定していた教育効果を実際に持つことが実証された点は高く評価される。特に、研究2において2種類の研修プログラムがどちらも効果を持つことからそれらを組み合わせてさらに効果の高いプログラムを改良した点に、著者の創意工夫が見られる。さらに、適切に研究の限界もふまえて今後の展望を最後にまとめられている点も今後の研究の発展が期待される。

令和3年1月6日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。